

令和2年度
劇場・音楽堂等機能強化推進事業
(地域の中核劇場・音楽堂等活性化事業)
成果報告書

団体名	公益財団法人神戸市民文化振興財団	
施設名	神戸アートビレッジセンター (KAVC)	
助成対象活動名	人材養成事業	
内定額(総額)	2,018	(千円)
公演事業	0	(千円)
人材養成事業	2,018	(千円)
普及啓発事業	0	(千円)

(1) 令和2年度実施事業一覧【公演事業】

番号	事業名	主な実施日程	概要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数	
		主な実施会場		目標値	
1				目標値	
				実績値	
2				目標値	
				実績値	

※ …新型コロナウイルス感染症の影響があったもの

(2) 令和2年度実施事業一覧【人材養成事業】

番号	事業名	主な実施日程	概要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数	
		主な実施会場		目標値	実績値
1	高校生のための演劇ワークショップ Go! Go! High School Project 2020 成果発表公演	8月2日～16日※	演目：『進化する、変わらないもの』 作・演出：F.O.ペレイラ宏一朗 出演：市内高校生	目標値	参加者数30、入場者数250
		KAVCホール		実績値	参加者数11、入場者数0名
2	KAVC FLAG COMPANY 2020-2021 関連企画&ワークショップ	11月14日、1月22日・23日、2月7日、2月27日、3月13日、3月27日※	トーク：ウォーリー木下、矢内原美邦、多田淳之介、戌井昭人、劇団 Ahwooo、劇団 努力クラブ、オパンポン創造社、劇団うんなま ワークショップ：飯島松之助・伊藤俊九郎、福谷圭祐、ピンク地底人3号、大熊隆太郎、山本正典、村角太洋	目標値	ワークショップ参加者数15×6回 トーク参加者数100×6回
		KAVCホール、リハーサル室ほか		実績値	ワークショップ参加者数9名×6回※、トーク参加者数約50名×4回※
3	第3回 新開地カブキモノ大興行	1月17日※	演目：第三回 新開地カブキモノ大興行～緊急事態 ver.「それでも、踊る！」 出演：芸術集団 山猫団	目標値	一般参加者数20、入場者数120、パレード鑑賞者200
		KAVCホール		実績値	一般参加者数0※、入場者数26※、パレード鑑賞者0※

※ …新型コロナウイルス感染症の影響があったもの

(3) 令和2年度実施事業一覧【普及啓発事業】

番号	事業名	主な実施日程	概要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数	
		主な実施会場		目標値	
1				目標値	
				実績値	
2				目標値	
				実績値	

※ …新型コロナウイルス感染症の影響があったもの

2. 自己評価

(1) 妥当性

自己評価

社会的役割（ミッション）や地域の特性等に基づき、事業が適切に組み立てられ、当初の予定通りに事業が進められていたか。

神戸アートビレッジセンター（KAVC）は、「創る劇場」として、「若手芸術家と協働しながら新しい表現を探究すると共に、地域に開かれた劇場として街に関わる」ことを社会的役割の一つに掲げ、神戸には数少ない演劇向きのホールとして、演劇や舞台表現の振興を担っている。

今年度取り組んだ事業は、これらのミッションに基づいて行った。「高校生のための演劇ワークショップ Go! Go! High School Project 2020」は演劇創作の楽しさを体感し、将来的に演劇を楽しむ人々が増えることを目的としている。関西の若手劇団による公演シリーズ「KAVC FLAG COMPANY 2020-2021」の関連企画は、演劇を鑑賞するだけでなく、ワークショップによる体験、トークや劇評による演劇鑑賞の視点広がりによって、演劇をより深く楽しみ、コアな顧客を創り出すことを目指している。「新開地カブキモノ大興行」では、市民参加型で公演を行い、劇場からまち（新開地）へ飛び出し、パレードをすることで、街の賑わいづくりにも貢献することを狙いとした。

しかし、3つの事業とも実施することができたものの、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、細部での中止・変更を余儀なくされることとなった。

「高校生のための演劇ワークショップ Go! Go! High School Project 2020」は、最初の緊急事態宣言が明けて間もない時期だったこともあり、オンラインを使いつつワークショップを慎重に行ったが、最終的には無観客配信のみとなった。「KAVC FLAG COMPANY 2020-2021」関連企画では、母体となるKAVC FLAG COMPANY参加公演そもそものが中止になった演目が2つあり、関連付けられていたトークや劇評公開は中止とした。一方で、ワークショップについては、人数制限はしたものの実施することができた。また、「新開地カブキモノ大興行」は、秋から年明けに延期したが、年明けも新型コロナウイルス感染症が拡大してきており、市民参加はリスクが高すぎると判断、併せてパレードも中止となった。ホール公演については、市民参加での制作という形はとれなかったため、急遽内容を変更して行った。ワークショップは人数を限定して行うことができた。

助成に値する文化的、社会的、経済的意義等が継続して認められるか。

今回の事業は、様々な変更があったものの、社会的な意義等は認められると考えている。

「高校生のための演劇ワークショップ Go! Go! High School Project 2020」は、演劇がしたいという志を同じくする仲間や先輩と、学校の枠を超えた繋がりが構築され、演劇が盛んではない高校に通う生徒にとって、自己表現をすることのできる場として、機能している。

「KAVC FLAG COMPANY 2020-2021」は、それ自体は若手劇団の共催公演シリーズであるが、ワークショップ、トークイベント、劇評公開という3つの関連企画をシリーズとして劇場が立ち上げることで、劇団、観客、劇場がつながり、当館がめざす「創る場」としての役割を担うことができる。特に、関西では弱い劇評文化の醸成に対する貢献など、長期的な視点で行うことで文化的、社会的に意義のある企画と考える。

「新開地カブキモノ大興行」は、芸術作品の創造とまちの賑わいという、多くの文化施設が狭間で揺れている問題を解決しようと試みている企画で、その社会的意義は継続して認められる。

(2) 有効性

自己評価

目標を達成したか。

(1) 高校生のための演劇ワークショップ「Go! Go! High School Project 2020」

高校生がプロの演劇スタッフと共に作品をつくることで、新しい表現に出会うことを目的としている。参加者数は25人を目標にしていたが、新型コロナウイルス感染症拡大のため、参加者の募集開始が遅れたことや、当時はまだ学校の部活動等での感染症対策について、合意されていた時期ではなかったことから、参加者は11人であった。しかし、オンラインという手法を使って演劇作品を作っていく過程を体験し、オンラインならではの表現の仕方を模索したことは、本プロジェクトの目的の一つである「新しい表現に出会う」ことについて、結果的にもっとも達成できた。

観客数については、1公演あたり125名を目標にしていたが、新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、無観客上演となった。YouTubeでの視聴回数は203回であり、ふだん劇場には足を運ぶことが難しい、遠方の人々が鑑賞することができたことは、よかった点としてあげられる。

(2) KAVC FLAG COMPANY 2020-2021 関連事業

いろいろな劇団やカンパニーの質の高い公演を定期的実施することで、市民に多様で新しい表現に出会っていただくことを目的に、KAVC FLAG COMPANY シリーズを令和元年度より実施している。

令和2年度は新型コロナウイルス感染症拡大により予定していた6劇団のうち2劇団が中止となったが、公演を実施したのは、Ahwooo、努力クラブ、オパンポン創造社、うんなまの4劇団だ。それぞれの公演に合わせて、ゲストを招聘したトークイベントを行い、また3つ以上の劇評を公開した。トークイベントの平均参加者数は54名であった。目標値100名には届かなかったが、新型コロナウイルス感染症拡大防止対策により客席数を1/2に制限していたことを考えると、妥当な実績値ではないかと考える。

また、関連事業としてワークショップをおこなった。原則として公演実施日とあわせておこなっているが、公演が中止になった場合でも、ワークショップは予定通り、感染症対策を十分に持って行った。そのため、各回で定員数を多少絞って実施おこなうことになり、参加者数の目標として平均15名あげていたが、平均参加者数は8名となった。

(3) 第3回新開地カブキモノ大興行

新開地カブキモノ大興行は、芸術集団山猫団と、地域住民からなる新開地舞踊歌劇団と一緒に作品を作り上げるホール公演と、当館が位置する新開地商店街をパレードすることを予定していた。ホール公演での集客目標が120名、パレードでの集客目標が100名であったが、新型コロナウイルス感染症拡大により、パレードは中止とした。ホール公演は、新開地舞踊歌劇団との共演は中止となり、山猫団単独公演とした。舞台の設営状況から、客席を設置できるエリアが80席程度となり、さらにコロナ対策で1/2に客席制限を行った結果、入場できた観客数は25名であった(ほぼ満席)。補う形で、有料オンライン配信を行ったが、様々な調整によりオンライン配信についての告知期間が短かったこともあり、視聴者数は41名であった。

(3) 効率性

自己評価

アウトプットに対して、事業期間が適切で、当初の計画通りに進んだか。
アウトプットに対して、事業費が適切で、当初の計画通りに進んだか。

新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、どの事業も計画どおりに進めることは難しく、常に変更と実施判断を迫られる1年であった。しかし、しっかり対策をし、スタッフ・参加者・出演者がコロナに対して高い意識を持つことで、計画した事業の実施は可能であると考えた。また、事業費については、内容変更により規模を縮小したものもあり、当初の計画通りには進まなかったものもある。以下に事業別詳細を記す。

(1) Go! Go! High School Project 2021

この企画は、夏休みを利用した高校生を対象にした演劇プログラムであり、通常は5月には参加者募集を開始するが、1か月以上予定を遅らせ、高校の通学が再開されてから、募集を開始した。本番は、夏休みが短くなったことに伴い、夏休み中に終わるよう日程を繰り上げて行った。

台本読みなどオンラインでもできることから始め、立ち稽古に入ったら当館 KAVC に集まって稽古を行うことを考えたが、参加者が複数の高校にまたがり、家族の事情もそれぞれに違うため、最終的にはすべてオンラインで行うことになった。新作を上演予定であったため、このような現状に合った台本をつくってもらい、準備期間に合わせて作品制作をすることができた。また、本番はオンラインでの上演となったため、舞台設営にかかる人件費や大道具・衣装等がほとんど必要なくなり、事業費が大幅に減少した。また、本番はオンラインでの上演となったため、舞台設営にかかる人件費や大道具・衣装等がほとんど必要なくなり、事業費が大幅に減少した。

集客については、このような事情により、上演内容がなかなか決まらなかったため、広報を開始することができず、十分な周知期間を設けることができなかった。

(2) KAVC FLAG COMPANY 2020-2021 関連事業

KAVC FLAG COMPANY 2020-2021 は、もともと年度後半でのプログラムだったこともあり、年度前半での緊急事態宣言を受けての延期等はなかったが、年明けの緊急事態宣言の影響を受け、上演作品の稽古が進まないなどの理由から、中止となった作品が2つあった。そのため、それに関連したトークイベントや劇評公開については、同様に中止とさせていただいた。

ワークショップについては、当初は公演に関連するトークイベントのゲストによるものと考え、ゲストは関西圏外から呼ぶ予定であった。しかし、このプランでは、ワークショップの開催が公演実施の可否に左右されることと、もし遠方からの移動制限がかかった場合に、トークイベントとワークショップの両方が開催できなくなることの2つのリスクを抱えることになる。そのため、ワークショップは公演と切り離し、前年度 KAVC FLAG COMPANY の公演を実施した関西の劇団に講師をしていただくことにした。これにより、ワークショップは予定されていた6回を組みやすくなり、問題なく実施することができた。また、ワークショップ講師に、今年度の KAVC FLAG COMPANY 参加公演の劇評を書いてもらうことすることで、今年度の FLAG COMPANY プログラムの中での公演とワークショップとのつながりを確保した。

(3) 第3回新開地カブキモノ大興行

当初9月のワークショップ実施・本番を考えていたが、新型コロナウイルス感染症拡大を考え、1月に日程変更したが、1月も東京で緊急事態宣言が出るほどの状況となった。アーティストである山猫団はPCR検査を行い、会食を制限するなど、できる限りの対策をした状態で来神いただいた。しかし同じレベルの対策を一般市民にさせていただいて公演に参加してもらうことは、それぞれの仕事・家庭・日常があるため、難しいだろうと判断し、山猫団単独の公演とした。またパレードも、新開地という土地柄もあり、人々が密になるリスクが高いため、中止とした。

パレード中止・公演内容変更の決断をしたのが、本番1週間前であったため、山猫団およびスタッフは大変であった。観客に対してはそのようなリスクも想定し、当日清算のみで対応していたため、小劇場という場所の小ささも手伝い、本番公演での混乱はなかった。

(4) 創造性

自己評価

地域の文化拠点としての機能を最大限に発揮する優れた事業であった（と認められる）か。

今回実施した3つの事業は、地域の文化拠点としての機能を最大限に発揮することができた事業であったと考えている。

(1) Go! Go! High School Project 2021

高校生を対象にした演劇ワークショップであるが、今回はコロナ禍で部活動としての演劇活動すらできない状況下で、オンラインを活用した新しい形の演劇ワークショップを展開することができた。これは、劇場という専門の文化施設で、アーティストと10年にわたり協働してきた実績があったからこそ、コロナ禍でも可能な方法を考え、実施することが可能になったことだと考えている。また、アーティストにとっても、集まることが推奨されないという、初めて直面する事態の中で、演劇人としてできることを考え挑戦し、成果公演という形で着地できたことは、新しい活動を切り開く一歩となり、地域の文化拠点としての役割を果たすことができた。

(2) KAVC FLAG COMPANY 2020-2021 関連事業

今観てほしい関西の若手劇団をセレクトし、紹介する演劇シリーズ KAVC FLAG COMPANY の関連事業として、劇団代表とのトークイベントや劇評公開、演劇を身近に楽しめる一般向けワークショップである。トークイベントは、彼らより一世代上で関西外で活躍している舞台人を招聘しトークを行うことで、アーティストに新しい視点を提供することを目的とした。作品の内容についてだけでなく、コロナ禍でどのように演劇やダンス公演活動ができるのかなど、今だからこそ話せるテーマにも触れることができた。

ワークショップは、身体を使うものや戯曲を読むものなど、幅広くプログラムすることができた。当初ワークショップの講師を関西圏外から招聘予定だったが、新型コロナウイルス感染症拡大の影響を考慮し、前年度 KAVC FLAG COMPANY 採択劇団に依頼したことで、若手劇団にとっては新しいチャレンジの場となり、参加者にとっては、身近なアーティストとかわる機会となった。

また、劇評については、関西ではほとんど取り組まれていないため、1つの公演につき、様々な立場の方からの劇評を原則3本あつめ公開をしたことは、小劇場文化の発展につながるものであったと考えている。

(3) 第3回新開地カブキモノ大興行

新型コロナウイルス感染症拡大による影響がなければ、プロのパフォーマンス集団である山猫団と、山猫団の代表長井絵里奈のワークショップに参加した市民からなる新開地舞踊歌劇団との、オリジナル舞台作品及び当館が位置する新開地商店街のパレードが行われる予定であった。それは、当館の文化施設としての機能を最大限に生かした、地域のための事業であったが、残念ながら完全な形で実施することはできなかった。

市民参加とパレードは取りやめたが、公演は内容を大幅に急遽変更して実施をした。何もない舞台エリアから、舞台美術を吊り、照明を当て、音楽を付け、ダンス公演として観客の目の前に現れるまでをパフォーマンスとして行うというものであった。サブタイトルに「それでも、踊る！」とつけられたように、コロナ禍で思うような作品づくりができない中であっても、あらゆる可能性を総動員させながら、表現できることを見せつけられた舞台だった。なお、公演は有料配信を行い、告知期間が短かったため視聴者数は多くはなかったものの、「創る劇場」として、アーティストと協働しながら新しい表現にチャレンジしていくことをミッションの一つとして掲げる当館だからこそできた公演であった。

自己評価

地域の実演芸術等の振興など、地域の文化芸術の発展につながった（と認められる）か。

今回実施した3つの人材育成事業については、地域の文化芸術の発展につながるものであったと考えている。

(1) Go! Go! High School Project 2021

高校生を対象にした演劇ワークショップであるが、演劇部のない高校に通う高校生も集団としての演劇活動ができることや、学校の枠を超えて演劇好きが集まる場であること、またプロの演出家と舞台スタッフ、そして劇場が全面的にサポートをし、クオリティの高い舞台が創造できることから、Go! Go! High School Projectは、地域の文化芸術の発展につながっていく事業である。今回は特に、ナビゲーターとして起用した F.O. ペレイラ宏一郎氏は、関西で活動する若手劇団プロトテアトルを主宰しているが、コロナ禍というイレギュラーな対応を迫られながらも、オンラインを使ったワークショップを編み出し、成果発表公演まで行った。これは今後の新しい表現づくりへと生かされていくと考えている。

該当事業の主催であった当館にとっても、コロナ禍で行う初めてのワークショップ事業であった。リアルで行うものとは違うが、オンラインを使った演劇事業の可能性を十分に感じる事ができた。実際、この事業実施後の演劇ダンス事業では、オンラインを取り入れた配信やトークイベントを行っており、実演芸術等の振興につながったと考える。

(2) KAVC FLAG COMPANY 2020-2021 関連事業

本事業は、関西で活躍する若手劇団を紹介するシリーズ KAVC FLAG COMPANY の関連事業として、トークイベントやワークショップ、劇評公開など、多角的に演劇を楽しむための企画であった。トークイベントおよび劇評については、観客にとって自分とは違う見方を提示すると同時に、作品をより深く楽しむための仕掛けであった。見る目を持った観客を育成することは、アーティストを育てるのと同様、地域の文化芸術の発展にとって必要不可欠であり、本事業はその一翼を担ったと考えている。また、劇評公開は、アーティストにとっては、外部からの的確な批評を受けることのできるまたのない機会であり、地域の芸術文化の振興につながるものである。

一方、ワークショップは、演劇の楽しさを知ってもらおうと、初心者も一緒に楽しめるワークショップを考えた。身体を使うものから戯曲を書くものまでさまざま、日ごろ演劇活動をしていないものも多数参加していただき、地域の芸術文化振興につながるものであった。

(3) 第3回新開地カブキモノ大興行

本事業は、本来市民参加型の舞台公演となる予定であった。それは市民からなる「新開地舞踊歌劇団」とダンサー長井絵里奈氏が3年をかけて築いてきた関係の集大成でもあり、「新開地舞踊歌劇団」が、当館が位置する新開地商店街を中心とした地域で、次のステージに進むための入り口となるはずであったが、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、市民参加は断念することとなった。

しかし、ワークショップは少人数ながらも開催をし、舞台は長井氏率いる山猫団のみでの公演を行ったところ、「新開地舞踊歌劇団」のメンバーを中心に、コロナ禍で削減した定員いっぱいまで参加者・観客が集まり、このような状況ではあるが、作品を作り、発表し、メッセージを発信することの大切さを、感じていたようであった。今年できなかった市民参加の舞台とパレードは、来年度に実施する機運が高まっており、実現できればと思っている。

(5) 持続性

自己評価

事業を通じて組織活動が持続的に発展する（と認められる）か。

3つの事業を通じて、当館の活動は持続的に発展すると考えている。3つとも、高校生や市民を対象にした育成型事業であり、様々な活動を通じて当館の固定客が増えることによって、当館の活動が発展し、延いては地域の芸術文化活動が活性化することを目的としている。個別の事業についての評価は以下の通りである。

(1) Go! Go! High School Project 2021

この高校生対象演劇ワークショップは、当館演劇事業の要の一つとなっている。演劇を志す高校生たちが、学校の枠を超えて、劇場に集まることで、地域の文化力が上がっていく仕組みとなっている。実際、本事業出身者で、俳優の道に進んだり、舞台技術者になったり、文化施設の職員になったりするものも出てきている。

当館のような公立の文化施設は、文化事業を担う専門人材を育成することも役割の一つとして求められているが、現場のことがわかるモチベーションの高い人材を育成するには、若いころからの現場経験が大切と考えている。Go! Go! High School Projectは、そのような意味で、我々の組織活動が持続的に発展するために必要であり、関西の芸術文化シーンが持続的に発展するためにも、必要な事業であると考えている。

(2) KAVC FLAG COMPANY 2020-2021 関連事業

KAVC FLAG COMPANY 関連事業を通じて、当館の演劇事業は発展していている。劇場として固定客をもつことは、劇場経営の安定だけでなく、文化芸術の発展のために大切であると考えている。KAVC FLAG COMPANY 関連事業は、演劇についてワークショップで体験したり、劇評の公開を通じて、同じ作品の様々な見方を知ったり、演劇人たちのトークイベントを通じて、アーティストの世界を身近に感じたりするなど、舞台芸術の世界を様々な角度から親しむことで、舞台芸術を好きになっていただき、また、このように多様な活動のできる場として劇場を認識してもらうことで、当館の固定客となることを目標としていた。

取り組み始めて2年目にコロナ禍となり、できることは安全対策を取りながら実施していたものの、公演中止に伴うトーク事業の中止や参加者数の制限など、様々な制約もあり、事業実施効果が出てくるのは、もう少し状況が改善されてからと考えている。しかし、ほぼすべてのワークショップに参加している子どもや、全部の公演を観てくれる観客なども出てきており、続けいくことが大切であると考えている。

(3) 第3回新開地カブキモノ大興行

この事業は、当館の位置する新開地商店街に対して、当館の活動をどのように浸透させていけるかという視点から出発している。一般財団法人地域創造の公共ホール現代ダンス活性化事業の支援を受けて、市民向けワークショップやアウトリーチ、商店街パレードを2年前から行ってきた。市民からなる「新開地舞踊歌劇団」が結成され、商店街の人々も応援してくれるようになった。この事業を行うことで、地域住民から支持される劇場となり、地域の文化力が向上し、劇場としての芸術文化活動が持続的になると考えている。